

えどがわく ようすい 江戸川区の用水(2)

上下之割用水

上下之割用水は小合溜井(現葛飾区水元公園内、溜井とは用水池のこと)水源とする用水路で、大用水あるいは大井堀ともよばれています。

下小合村の垣樋(水門)から引かれた用水は、岩槻橋を経て南下し、新宿(葛飾区新宿四丁目の大堰桿交差点付近)で左に小岩用水を振分け、幹流は少し下った曲金村(葛飾区高砂七丁目付近)で東井堀(東用水)を分水し、細田字三角(葛飾区細田三丁目付近・新中川土手、あるいは新中川の中)で中井堀・西井堀の二線となりました。

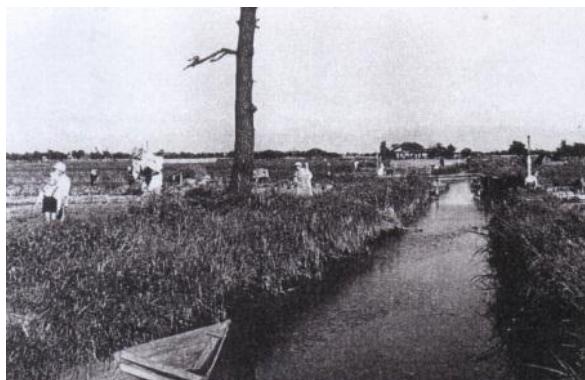
小岩用水は、江戸川区内で上小岩、中小岩へ下小岩に至り江戸川に注いでいました。

東井堀は松本、鹿骨を貫き谷河内、南篠崎などの境界を下り、前野から江戸川に入りました。

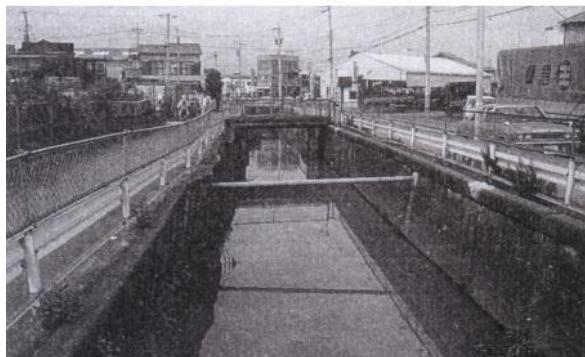
中井堀は本一色を二分しながら大杉を経て春江と一之江の境を流れながら右に振れ、やがて新川につなぎました。

西井堀は西小松川から逆井へと南下し中川へ注ぎました。

しかし、十分な水の供給があったとはいえず、渴水期には水不足に悩まされました。明治に入り、上小岩村の石井善兵衛を中心に直接江戸川の水を引くことにし、明治10年(1877)の干ばつ



東井堀・谷河内付近(昭和25年)



中井堀・春江町付近(昭和60年)



西井堀・巽橋(葛西区)付近(昭和60年)

を機会に着工、翌11年(1878)に堀樋を完成して、用水を確保しました。「善兵衛樋」とよばれるのがこれのことで、現在は排水路となっています。

長い間、江戸川区の田畠を潤してきた上下之割用水も、大正12年(1923)関東大震災以降から都市化による生活排水や生ごみなどの堆積を原因に、流速は緩慢になり、次第にその機能が衰え流末まで灌漑する能力を失い、やがて一部に干害が起こりました。

昭和10年(1935)、東京府営事業で上流に揚水機を設け水量の増加を図りましたが十分な効果をあげることができず、流末一帯は新川および一之江境川から送水を求めるようになります。ところが、今度はそのために塩害を受けました。江戸川区内の塩害水田は500町歩(1町歩は9917.35m²)にも及んだといわれています。それを救うために、今度は新しく江戸川用水を新設することになりました。

江戸川用水

昭和23年(1948)東京都は、上下之割用水の流末地域から葛西地区にかけて、用水不足による干害および塩害を救うため、実態調査を行いました。その結果、塩水を含まない江戸川の水を取る用水路の新設が決定しました。北篠崎の興農と南篠崎や本郷に取水口を設け、興農幹線水路と本郷幹線水路を引いて鹿骨の流堀につなげ、合同幹線水路としてさらに南流し、放水路(現新中川)をくぐり、新川を渡って葛西に至る水路です。昭和25年(1950)に着工、同28年(1953)にはサイフォン管(144m)で放水路の川底をくぐり抜け、同35年(1960)には長島川との合流点に堰が設けられ、昭和42年(1967)3月に全線が完成しました。現在はそれぞれ親水緑道に整備されています。



昭和25年(1950)頃の鹿骨付近



興農親水緑道

江戸川区郷土資料室

〒132-0031 東京都江戸川区松島 1-38-1 グリーンパレス 3階
TEL : 03-5662-7176 (9:00~17:00)